吉野川お散歩紀行

脇町・うだつの町並み

寺町　安楽寺の能舞台

吉野川河畔ふれあい広場

四国のまほろば、美馬市で竹を活かしたまちづくり

『まほろば』とは、『素晴らしい場所』『住みやすい場所』を表す、美しい日本の国土とそこに住む人々の心をたたえた古語。四国のまほろばの町づくりを目指しているのが、吉野川中流域のまち、美馬市だ。市の中心部を東西に吉野川が流れ、それを挟むように北岸には県道12号鳴門池田線、南岸には国道192号が通っている。

豊かな自然と多くの文化財が残る美馬市。藍の集散地として栄えた脇町『うだつの町並み』には、古い商家が立ち並び、多くの観光客が訪れる。また、歴史あるお寺が立ち並ぶ寺町の町並みは、どこか香り高い文化の風格を漂わせる。

吉野川とも関わりの深いうだつの町並みでボランティアガイドの方に町を案内していただき、吉野川の竹を使った取組みを行っている安楽寺、吉野川をフィールドにカヤック体験を行っている団体AMEMBO（あめんぼ）を訪ねた。

歴史を感じながらの町歩き　平田船を うだつの町並みの壁にリサイクル！？

脇町・うだつの町並み
文化庁より、昭和63年（1988）重要伝統的建造物群保存地区（全国で28ヶ所目）に選定されている。江戸時代から昭和初期にかけての歴史的な建造物が立ち並んでいる。

脇町・うだつの町並みボランティアガイド連絡会　会長　塩田正則さん。
幼い頃の吉野川は、遊び場。泳ぎ方を友達に教えたりと、楽しい思い出があるそうだ。

「脇町・うだつの町並み」（430m）は当時の町並みが残され、歩いていると、江戸時代にタイムスリップしたような気持ちになる。うだつの町並みやその周辺を、ボランティアで案内しているのが平成８年（1996）に設立された「脇町・うだつの町並みボランティアガイド連絡会」だ。徳島県内のボランティアガイドの先駆的な存在で、おそろいの藍染めの法被と帽子を着用し、町並みの特徴、文化、歴史などを希望に応じて案内してくれる。

現在のメンバーは13人。平成28年度には9,903人を案内した実績を持つ。研修会も熱心に開催し、新しいMAP「うだつ町歩きの達人」も作成した。

新しいMAP

「うだつ」とは、二階両側の隣家との境界にある袖壁のことをいう。元々は火よけのために作られたものだ。うだつを作るには相当の費用がかかるため、裕福な家だけが設置することができた。「うだつが上がる」とは富を象徴する言葉。うだつの上がった家が立ち並ぶ「うだつの町並み」。17世紀から19世紀にかけて徳島県西部を代表する藍の集散地として栄えた当時の繁栄ぶりがわかる。現在は85軒の歴史的な建物と、50本のうだつを見ることができる。

富の象徴うだつ

多くの人々が訪れる案内の様子

「うだつの町並み」のすぐ近くには吉野川が流れ、藍商人た

ちが藍等を送るための船着き場があった。石段を上がると藍商たちの敷地へと通じている。まさに歴史を感じる入り口だ。

鉄道が開通するまで、物資の輸送は川船が主流で、輸送に使われていた帆掛け船のことを「平田船（ひらたぶね）」と呼び、吉野川を行き来していた。

現在は「舟着き場公園」となっている船着き場跡

うだつの町並みの中に、江戸時代に使われていた平田船の船板を使った船板壁が建物の一部で使用されている。まさに、現代でいうリサイクル。今回の塩田会長の案内で、初めて知った編集メンバー。みなさん、ご存知でしたか？

場所は、うだつの町並みの西の入り口、美馬市観光協会近く、川湊や船着き場があった付近の３ヶ所で現存している。日本三大暴れ川の一つである吉野川は、台風のたびに水位が上がり、水に弱い建物の壁が落ちてしまう。そのため壁が落ちないように水に浸かりやすい下の部分に船板を使い、船釘でつなぎ合わせている。船釘は板と板とを合わせる釘であり、通常、埋め込まれて見えないが、長年の風化によりむき出しとなっているところもある。船釘の材料は、はがね。明治30年頃まで刀と同じように一本一本が打って作られた。打ち直して何度も使用されてきたのが船釘だ。舟運で栄えた町ならではの工夫が「うだつの町並み」にも活かされている。場所の詳細はぜひ、美馬市観光協会で配布されているMAP「うだつ町歩きの達人」でチェックしてほしい。うだつの町並みとともに、舟運の歴史も感じに出かけよう。

うだつの町並みのすぐそば。堤防からの吉野川の眺め。脇町潜水橋。塩田会長のお気に入りの場所の一つ。写真提供：塩田正則氏

脇町・うだつの町並み

※「安楽寺」についても地図上に表示

脇町・うだつの町並みボランティアガイド連絡会　（美馬市観光協会内）
〒779-3610 美馬市脇町大字脇町92
TEL:0883-53-8599 FAX0883-53-0961
ボランティアガイド希望の際には電話、FAXでの申込みが必要。
賛助金:バス1台ガイド1名につき2,000円
1～4名まで、1人につき500円 美馬市観光協会HP→

自然と共生し、吉野川中流域の竹林を後世に残したい

美馬市水辺の楽校運営協議会会長 浄土真宗本願寺派 安楽寺住職 千葉昭彦さん。吉野川への想いを語っていただいた。

数多くの文化財も残されている美馬市。徳島の文化の発信拠点の一つにしたいと徳島県内唯一の能舞台が安楽寺にある。安楽寺は、美馬市を中心に撮影された山田洋次監督の映画「虹をつかむ男」の撮影等にも使用された。吉野川も美しいシーンの一つとして紹介された。

千葉さんは開口一番に、「10年以上前の話ですが、吉野川の堤防の竹やぶから、こんな声が聞こえてきました」と語り始めた。「私はここにいます。私のことを忘れないでください。私にも何かお役に立てることがあるはずです。私にありがとうを聞かせてください」という、竹からの声だったそうだ。このことをきっかけに、本格的に竹を再利用する活動が始まった。

吉野川中流域に残されている竹林は水防の役割を果たしていた。また、春にはタケノコが採れ、和傘の材料にも使われ重宝されていたという。吉野川沿いに広がる竹林。こんなに風光明媚なところは他にはなかなかないと、千葉さんは語る。幼い頃の遊び場であった吉野川。気がつけば現代の子どもたちにとっては「危険だから行ってはいけない吉野川」となっていた。このままではいけないと、「子どもたちに水辺の思い出を届ける」をテーマに、水辺の楽校を拠点に春祭り、炭焼き体験など様々な活動を行っている。今年の２月には協議会からの呼びかけにより、廃校前に最後の卒業生となる重清東、重清西両小学校６年生が中鳥川沿いで、桜の植樹を行った。子どもたちにとっての良い思い出作りとなった。

今年の８月には、協議会が主催し、吉野川、利根川、筑後川の３つの流域で活動しているメンバーが集う「日本三大河川シンポジウム2017～自然＜吉野川＞との共生～」が、安楽寺を会場に行われた。これからも吉野川の自然と共生する美馬市から吉野川の魅力が発信されていく。

安楽寺前にて。
毎年、12月29日頃には協議会や近所の人々が集まり、吉野川の竹を切り出し、竹灯籠づくりを行う。
写真提供：千葉昭彦氏

安楽寺 竹灯籠

毎年行われている大晦日深夜から元旦にかけての吉野川の竹を使った安楽寺の竹灯籠。幻想的な雰囲気を楽しみに、除夜の鐘をつきにくる人も多い。

開催期間
2017年12月31日（日）深夜23時30分～
2018年1月1日（月）午前2時頃まで
場所：安楽寺　地図は、うだつの町並みの頁参照
〒771-2105 徳島県美馬市美馬町宮西11
TEL：0883-63-2015

写真提供：千葉昭彦氏

美馬市　吉野川河畔ふれあいひろば
カヤックで子どもたちを笑顔に!

川づくり

AMEMBO
代表
藤川　雅仁さん

まちづくり

地元美馬市生まれの藤川さん。仲間といつも子どもたちを喜ばせることを考えているという。「仲間がこんなことをやったらといつも提案してくれます」と笑顔で語る。

子どもたちは、身体いっぱいに自然を感じる。いきいきと笑顔がはじけるカヤック体験。写真提供:AMEMBO

平成18年に結成された『AMEMBO』。水辺で子どもたちの笑顔が見たい! 吉野川の自然の素晴らしさを子どもたちに体験してほしい! そんな思いで結成されて11年。今では、活動の中心となっているカヤック体験に、年間約2,000名もの人が訪れるようになった。

しかし、ここまでの道のりは、簡単ではなかったと代表の藤川さんは言う。フィールドにしている吉野川中流域 美馬市にある吉野川河畔ふれあいひろば。吉野川の水辺に近づける貴重な場所だ。藤川さんたちが活動を始めるまで、ここでは子どもたちの明るい歓声が聞こえることはなかった。吉野川は危険、近づいてはいけない場所と言われていたこと。また、時代の変遷とともに、外で子どもたちが遊ぶことが少なくなっていたためだ。

そこで、藤川さんたちは立ち上がった。「自分たちが子どもたちを守るから、安全だ!」それを知ってもらうため、まず自分たちの活動や考え方を伝えることを始めた。県内の学校の校長会、教頭会、学校に出かけて、先生たちにも説明をした。学校のプールを使い、ライフジャケットをつけてのカヤックのデモンストレーションも行った。そんな地道な積み重ねで少しずつ学校の理解を得られるようになり、今では学校単位で体験に来てくれるようになった。「子どもはね。うれしいことがあると家で親に話すんですよ。今日は、吉野川でこんなことしたんだよ。それを聞いている親も本当にうれしいんですよ」そのことを話す藤川さんもなんともいえない優しい笑顔になる。

カヤック体験の前には、吉野川はどこから流れているのか、山があるから下流に川が流れていることなども教える。また、ピザ作り体験や、ツリーハウスでの里山体験のほか、日本の伝統行事であるどんと焼きを開催し、地域の風物詩として定着している。

これらの活動が認められて、2016年度には、国土交通省の手づくり郷土(ふるさと)賞を受賞した。国土交通省や地元NPO美馬体験交流の会等と連携し、『水辺の楽校　春祭り』を開催するなど地域の中でも大きな役割を果たしているAMEMBO。吉野川とともに、AMEMBOの皆さんの活動は続いていく。

AMEMBO

詳しい活動内容は、ホームページをご覧ください。